

猿新聞

編集責任者
山村 準
tel:0595-63-1725E
mail
jyun.y@asint.jp
名張鳥獣害問題連絡会
発行部数
【全戸回覧】
錦生地区：100部
赤目地区：150部
箕曲地区：70部
ひなち地区：200部
つつが丘：440部
【全戸配布】
国津地区：380部
市民センター：90部
(9地区)
名張市議会：20部
名張市役所：20部

獣害対策は、自分たちの問題だ！

認識再精神互助

獣害による農作物被害は、年々増加し深刻化していきま

住宅への侵入や交通事故の誘発など、生活面、精神面へも深刻な影響を及ぼして

います。

これら獣害に対しては有害捕獲、広域柵など対策全てが行

政主導で進められて

いて、地域住民の意識は行政がやってく

れるものという依存

体質となつています。

「サルが出た！」役

所に電話。「シカが

来た！」

役所に「助けて！」という現状です。

「獣害対策は自分たちの問題だ！」という認識や気が希薄になっていて、獣害に歯止めがからない一因にもなっています。

従って今後は、獣害対策は行政の仕事であるという依存体質から脱却し、獣害対策への住民意識の向上を図ることが必要です。農家は「獣害対策は自分たちの問題だ！」、「自分の畑は、自分で守る」という意識改革を図るべきです。

自治体単位で事業化しても、実際には小さな集落単位で動

いていかならない効果的な対策に

つながりません。

それぞれの集落の環境に合った必要なの

です。

かつては、地域に根ざす風土の中で築き

上げられてきた地域に

応じた対策があり

ましたが、近年では

その対策が画一化さ

れ地域特性がなくな

りつつあります。地

域に伝わる野生動物

と人間のかかわり方

には地域ごとに違い

があり、この違いを

正確に押さえてお

かないと、肝心の

対策に誤りが生じ

てきます。

江戸時代、先人は

万里の長城を思わせ

る長大なシシ垣を全

国各地に構築してい

ますが、全て幕府

(行政)の力を借り

ることなく、集落みんなが協力して造ったもので、維持管理も幕府の手を借りず農民で行ったとい

ます。獣害への対処は今も昔も変わらず、時代を越えて続く課題であり、現代を生

きる私たちは、先人の知恵と気概を踏まえ、現代版の取り組みを行うことが私たちの責務と考えます。

野生動物と直接か

かわる農村が人口減少、高齢化などにより

少、高齢化などによ

り疲弊する社会状況

があります。だが、

鳥獣害は個々の問題

ではなく、集落全体

の問題と捉え、これ

まで培ってきた「結

」という共同体の互助精神を再認識し、個人的

な対応に加えて、地域ぐるみの継続的な取組みが必要にな

てきます。獣害は個人で解決できるという簡単な問題ではありません。

鳥獣害問題にはもう一つの大きな難問があります。獣害に対する意識差・温度差です。農村と市街地。また、農家と非農家。被害の多い所、少ないところ。というように個々に獣害に対する意識の違いや温度差が生じます。

この是正が難問で、いまだにこの温度差が獣害対策のネックになっていきます。農家も街も人間が野生鳥獣に負ける日があると、そこまで迫ると言う共通認識が必要なことです。



共存 棲み分け



近年、獣害対策の中で「共存・共生」や「棲み分け」という言葉をよく耳にします。

どちらも同じように思う方が多いと思いますが、大きな違いがあるのです。辞書など検索すると難しいことが書いてありますが、簡単にいうと「共存」とは

互いがケンカしないで、ともに同じ場所で生活するということです。異なる生物を同じ環境で生活していると、いろいろなことでケンカが起きますが、そういうことが起きない現象。「共存」とはお互いが助け合っていることを指します。

片方がいなくなるともう片方が困るとい

う関係です。植物と昆虫は共生関係で、一緒にいないと困るものが多いです。

「棲み分け」とは、領域を分け、ケンカしないで互いの利益をある程度まで守りながら生活して行くことです。

日本では、古くから奥山に動物が棲み、人は里に住むという棲み分け・共存が図られてきました。世界の先進

国の中では唯一、大型野生動物との共存が図られていた国だったのです。だが、近年ではその図式は崩れ、多数の野生動物が里に出

没し被害が深刻化して

います。では、野生動物は、なぜ山から里に下りてくるようになったのでしょうか。それは、野生動物が里にきたのではなく、人間が彼らの棲み家へ近づいていったのではないのでしょうか。獣害がこ

まで深刻化した根本的な原因は、人間が彼らの生息域(奥山)に侵出し開発した結果なの

です。獣害対策の解決策が見い出せない中で、いま問われているのが、野生動物と人間の共存を図る対策です。黙って見ているだけでは環境はますます悪化し、人類が農耕を始めて以来続いていた野生動物との棲み分けの歴史も終わってしまいます。

戦後の拡大造林政策

により日本の多くの森林が、針葉樹林となり野生鳥獣の餌が少なくなっています。奥山と人里の垣根であった里山が荒廃しその機能を失っています。また、天敵の絶滅などで野生動物の個体数が激増し、奥山では増えすぎた個体群を維持しきれなくなっています。このよ

うな状況下、追い払いや防護柵、駆除など対策を講じていますが、

追い払いや防護柵は被害地域を移動させるだけで、費用対効果を考える時、考えさせられるものがあります。抜本的な解決策が必要で

す。それには、個体数を適正数に落ち着かせ、自然林の復元を図り、棲み分けによる共存の道を探る事です。耕作放棄地・里山の復元など野生動物が里に下りてきやすい環境を改善し、山では動物の餌

となる広葉樹林の再生や現在の広葉樹林を整備するなどの取り組みが必要になります。広葉樹林がないと彼らは生きていきません。

二者択一的な安易な対策ではなく、視野を広げ先を見越した野生動物との棲み分け・共存を図る方法について今しっかりと考えるべき時期にさしかかっているのではないのでしょうか。

クを考えると、農家は費用対効果を無視した対策を続けています。作物が被害にあうことによる精神的なショックは、深刻な問題となつています。お金のかわらない対策として目隠し栽培があります。トウガラシやコンニャクなど野生動物の嗜好性の低い農産物を、農地の外周に目隠し代わりに植え、狙われやすい作物を隠すように植えた

(2面につづきます)



対策の基本



▼農業形態改善
現在の農業形態は、野生鳥獣の被害がそれほど問題とならな

かった戦後に構

築されたもので、

野生動物に対しての配慮や対策は

まったく組み込まれていません。

農業形態は各地

各様に違いがあ

りませんが見直す時期がきてい

るのではないのでしょうか。稲刈り時期が全国的に早まったため、冬期に水田と畦畔が緑草地化しやす

い状態です。

稲刈り直前の草刈りは必要最小限に。秋の除草が冬の草量を増やします。圃場は稲刈り直後に耕耘して二番穂の発生防止。冬場の野生動物の目

当ては農作物よりも雑草です。雑草で集落に誘引され、農作物を食べるのです。

▼非意図的餌付け
非意図的餌付けが野生動物を誘引しています。収穫しない果樹や取り残し野菜など。普段の何気ない行動が餌付けになっていることに気づく必要があります。何が餌付けになるのか集落のみんなが理解することが重要です。

▼被害の始まりを見逃さない
ほ場周辺の生活痕跡(糞や足跡)を見逃さず対策をすること

が重要です。テレメトリー発信器の積極的活用など初動体制が

肝心です。

▼敵を知る
加害獣の生態や習性を知ることで対策の第一歩です。生態・行動特性に基づいた防除技術の確立です。生態や習性を知った上での対策でないければ効果はあがりません。

▼地域ぐるみで
山村は少子高齢化・過疎化が進展する現状下、獣害対策は重荷となつてい

ます。そこで地域ぐるみの対策が必要

です。共助の精神で女性・高齢者も、地域を守るために個人パワーから集団パワーへ切り替

えることが必要

です。野生動物は基本的に臆病で人

を恐れる生き物です。昔は里山という緩衝地帯が図られていたのですが、現在では里山は荒廃し機能していません。棲み分け・共存を図る上で欠かせないのは、里山再生による緩衝帯造りです。

▼広葉樹林再生
野生動物を追い上げて行かない場所がなければ戻ってきます。野生動物の生活場所は広葉樹林で、広葉樹林がないと彼らは生きていけないのです。棲み分けを指す上での項目の一つに広葉樹を植林したり、現在の広葉樹林を整備することが挙げられます。今後は、棲み分け・共存を図る上で必要不可欠な事業の一つです。

家庭菜園を守る



春先は、動きが鈍って

いた害獣たちも

どんどん活発

に動き出す季節

で、防護柵の点検・修理

の季節でもあります。

春にはタケノコや麦などの被害が多く、以降は季節に応じて収穫期を迎える農作物の被害が続きます。被害が開始したら「すぐに対応」することが重要

です。対策をしないことは「餌付け」と同じ。人間にとっては必要のない屑野菜でも野生動物にとつては餌。必要がないからといって、畑に残り物などを放置することは餌付けを行っていることと同じです。

サル対策は難しく、天井までネットで覆うなど対策に多額な経費が必要で、対費用効

果から見ると収穫野菜は八百屋で買うより高

くつきます。だが、食

い荒れてしまつてショク

クを考えると、農家は費用対効果を無視した対策を続けています。作物が被害にあうことによる精神的なショックは、深刻な問題となつて

います。お金のかわらない対策として目隠し栽培があります。トウガラシやコンニャクなど野生動物の嗜好性の低い農産物を、農地の外周に目隠し代わりに植え、狙われやすい作物を隠すように植えた

(2面につづきます)

